

にはなれてきがのこるといふなども、雅俗の分は、自殊なりといへども、おもむきは絶て相似たりといふべし。

〔嬉遊笑覽詩三〕

文字を謎にすることあり、無ナクハナカガヨケン惡善し、子のこのし、などの類也、千載集に、季通、こ

とごとにかなしかりけりむべしこそ秋の心は愁といひけれ、こはむべ山風の歌の類にて、謎にはあらず、文字を解るなり、見る石の面に物はか、ざりきといへるは、謎といふべし、池田正式が、狂歌合に、蘭を草ふきに門をかまへて、西かはのむかひにあきの花ぞかほれる、是いま童のいふ草冠やはたちの下に門建て、とうや東やらんやあら、ぎといへるに似たり、漢土の字謎といふものはなり、桂花叢談馮翊 太保令狐相出鎮淮海日、支使班蒙與從事俱遊大明寺之西廊、忽觀前壁題云、一人堂々、二曜重光、泉深尺一點、去氷旁、二人相連、不欠一邊、三梁四柱烈火燃、添却雙勾兩日全、諸賓至而顧之、皆莫能辨、獨班支使曰、一人非大字乎、二曜者日月、非明字乎、尺一者寸土、非寺字乎、點去氷旁、水字也、二人相連、天字也、不欠一邊、下字也、三梁四柱烈火燃、無字也、添却雙勾兩日全、比字也、以此觀之、得非大明寺水天下無比八字乎、衆皆恍然曰、黃絹之奇智亦何異哉、また雞肋編宋莊 筋屐之謎載于前史、鮑昭集中亦有之、如一士弓張泉非衣金卯刀十里草之類、其原出于反正止戈、而詩人因字作謎とありて、王介甫が作れる字謎を多く舉たり、

〔北邊隨筆四〕なぞく

又落書といふ事あり、江談抄云、嵯峨天皇之時、無惡善といふ落書、世間爾 多々也、篁讀て云、无惡カナク善ナヨカリ讀云々、天皇聞給、天、篁所爲也、被仰天、蒙罪トス之處、篁申云、更不可作事也、才學之道、然者自今以後不可絶、申云々、天皇尤以道理也、然者此文可讀、被仰ト令書給、とて、さまざまよみにくき事どもをあげられたり、此落書といふ物も、なほなぞくに似たるわざなれど、なぞくは、今俗にいふに同じかるべし。